宮代国望川男
大竹寿太郎

越後中蒲原郡橋田
宮村住成村
最乗石祥

紙

復啓

貴書奉拝見仕候愛情之市迚
勝れがたく斜い奉永和大雄
山ハ移転するとなく去一日内入学
筆門なもなく小城ハ飛騨ゐ多
忙を極め乍思市寸音信仕れ改
めて市迚ゐ而仕ひ日出東京昭辺迚
ゐこ出ゐ出ゐ出ゐ好便宜ゐ出ゐ来
十二日より四日な在出ゐ拝て拝度
奉あ宮ゐみいれて延納陳書の致す
改ゐ乱す市東山の市慈愛と御座し

十二日より四日なれども拙庵に於て拙庵
会あるみいれて延初庵主の法
話かなすに市左衛門の慈愛と御恵し
に遊庵に依るもの迷初とは尊ろ恢
恩に報へまい作を空拙庵主の方
は別に奇特すと謂た市一井心の
に頂戴として住庵の任務を果すの外
に市左衛門のために休は帰望む
このしく様に御庵の市年回も過れも
せめて一吹雪をも帰望致と期
望し多日を数見に苦心致
市一回拙庵より市初中上大姉心
へは以て私に法話に度に時に市
生百に 拙庵
居九月六

三代 来石禅

大竹 太郎 拝

山石代國、深川四郎

大竹安太郎様

三州西加茂郡廣瀬
廣濟寺戒場
紫雲寺

書落

過日は特と上山被下厚情忝く
存の陳に思処なき事ふて恐乍
のけ乍ら元の毒を第三存しし併し
深度を文けらせ永遠佛界し
好因縁蓮華其上し道の
興を嬉しく感しし被は美濃
屋物ふ多り京都ふ赴き昨朝
名古屋ニ一泊本日當城ふ
着十字和古山へ帰社一月

第十号報告山へ帰着 一月
十五日まで出山し縁家に泊まり
第拾参信の礼免状を受ける
長沙法相寺に宿し翌朝
出立諸諸祓六段に而家内
出一同に家出国状又明節
相而自宅一初上
大正十年十二月 早く帰
石神丸

大井安太郎様
芳右

みほとけの乃
名のもとも源を
梁川の
法流世界に
乃り相自覚

福島縣濃川町
大竹安太郎様

封

武將殿見
紫雲寺

書翰

尊御清適奉恭賀候
先般所龍山接城會に拙特
に御上山御迎被下福梁佳復
を形影に送迎初中後共甚
深く御厚情筆紙に盡し

深く御厚情筆紙に盡し
難く感激仕候 大阪奉
賀奉仕を始め 皇町 法君子
方々御親情山宮海月只
管ふ地感泣い歸京に際し特
福島まで見送り入籠入細
所厚遇且歸京後の健康を祝
案中電報を賜り杯等ふ
堪嗚咽 神奈川 健全
庶務を感せず 仏宗會其他
多数約束多忙を極め 本日
午後十一時上野發ふて郡山迄
く事に相成候 茲に藤河

本陣十一日上野豊前郡山迄
と軍に相成候ハ茲ハ無之
此旨申上ル間敷ハ當板之宜帯
市村鉄五郎儀ハ町老板始
め夫々此状可申之旨
きゝ及ハ候ハ進之旨状
つゝ仕ル村八方者一同之儀
軍に彩を

大正十年十一月十日

於鞆山

石津五

大竹安太郎様

神奈川県横浜川町
大井太郎様

紙
武州野毛
諸誌屋

新年ハ御高茅先度
中細ハ四朧ハ華
墨を初ハ奉なく拝見ス
大阪奉ハ御ハ御僅
御ハ多数ハ入魯を見ス
玉ハ事成ハハ斜ハ
初ハ客日中約二間ハ小田
原白打鼎ハ住巻拝ス方
諸ハ御次住原ハ得ハ皆
ハ省巻拝ハ度ハハ家内校及
ハ拝ハ度ハ早ハハ宮
発ス元ハ

石塚

大行寺太郎様

岩代国梁川町
大竹安太郎様

封

神奈川縣鶴見町
大本山總持寺
振替口座 東京三五

寄書過日を御出被
下候ては定情奈く存候
為ふ度存候
下郷定信なく又
大阪金貸方
事ハ多端く存候
十二日場玉ふ
本日は 怪雲
を 親陸し明日は感状

を頼隆　明日は感状遣す

埴谷復小田原向相模守

へと謙宣移す事勢地も相

違なく陣営あり宮原ふ

順川へ油の方別陣相

違ふ古あい神社寺領

相違は当小田原へ寄れ

共れい湯川へ意あふす

油断せし相違宿

町長相違無宮原ふ

急ぎ市場神社

市家西市二間あり宮部

市風祭れ部第記

大西十二月十日

石塔五

大井安太郎撮

光右

福島縣須川町
大竹安太郎様

村

和歌山田原村村
向村庵

書落

益々御健勝奉恭賀
今回小復京御赴任
山へ御寄御書面及御
品々干柿御恵贈御
厚情深感佩致候
御存じ之家族の面倉
〻奉存候酒部か風邪
浸れかち彼〻快愈候様

浸されが御心快愈被遊候
十一日之昼帰山可仕大阪橋
管様御迎情に依り多数
御入魂被成候日は愈々初冬
山あらせられを玉大し幸栄
屈指御伴申上候時小雨
温代御家風順一屋内
自宅被成度御家内及
町内相始め皆様宜布
御被遊奉

大正十二年三月吉　　おとく

大竹太郎様

石禅